〝シャンシャン、シャンシャン〟（はざま隆治）

たい　母の産んだ8人の兄弟姉妹の1人は20歳から音信不通だ。彼を除いては皆元気でそれぞれの人生を歩んでいる。

母の記憶がまだ鮮明な頃に「ありや、ちゃーそうがやー」と嘆息混じりに話したことがある。でも帰りたくても帰れない事情があるから連絡もないのだろう。

「故郷は遠きにありて…帰るところにあるまじや」の心境かもしれない。

「兄弟姉妹が多ければ1人ぐらいそういうのがいるよ」とあっさり答えを出すことなく一緒にそろって母の前に立ってみたい。その瞬間に母の記憶がよみがえることを願っている。父と母の同じDNAを受け継ぎ、それぞれの個性を育んだ人生の重みをかみしめながら母に感謝したいのです。（読谷村、会社員）

うそっぱち

大掃除
米軍基地を島外へ掃き出したい
沖縄県民
（ポテンヒット）

問題

手段を

って処理すべきなどを勘案し、許可ないとの判断」をしたのはなにれは前知事の承認をした翁長知事自認取消を取り消し

復活させた法的結ない。

した違法確認訴訟県の上告が昨年12高裁において棄却訴が確定した。そ月26日に翁長知事

が、何ら法的な理由・義務がないにもかかわらず、承認取消処分を自ら取り消した。それは前知事の埋め立て承認の適法性を県が認めたことになり、その適法性を前提とすると、港の使用許可は不可避となる。

その他の建設阻止のための種々の知事権限の行使も、行政上の権限濫用や国家賠償法第1条の不法行為に基づく損害賠償請求権、さらに知事に「故意又は重大な過失があったとき」の知事個人に対する県からの求償権を発生させる可能性が生じる。

私たちの4度に及ぶ早期承認撤回の要請に対し、県が「検討中」と答えてやがて1年になる。時がたてばたつほど工事量が増大し、県は袋小路に長く深くはまり込んでいく。承認取消処分の取り消しを敗訴前から表明していた翁長知事に、承認取消の取り消しをなすがままにさせてしまった反基地運動の団体・与党・県民世論もその政治的責任の一端を負うべきだろう。

結局、この新たな苦境に追い込まれた知事が一刻も早くなすべきことは、承認撤回と同時に、国に撤回の効力の停止をさせないような法的手段を講じるより他に道はない。

（うるま市、元東京簡裁裁判官、77歳）

琉球新報　2017年12月19日

南風

建築は細部にあり

東恩納　厚
東恩納組　代表取締役会長

熱々と、匂い立ちこめ、柚子のお湯、小夜吹く風に聞く冬の音。

我が拙文も最後である。光陰矢の如く人を待たない。

医師を辞めた人生を正解とは思わぬが、天の定めしことである。父を亡くし、父を感じたくてこの仕事を始めた。夜深けに起きて、その日に廻る現場の図面を観る。一年前なら解る筈も無いが、日々の学びは、闇に明かりを灯してくれた。

近代建築の三大巨匠のひとりLudwig Mies van der Roheが好んで使った言葉に「神は細部に宿る(God is in the detail)」がある。

私は、これに強く惹かれる。建築に限らず、細かい部分まで丁寧に仕上げてこそ、仕事を為したことになろう。

完成した建築物から、基礎や躯体の詳細を伺い知ることは出来ない。見栄えも大事であるが、その裏に隠れた構造物が人を守るのである。その為には、細部まで仕事が為されていなければいけない。

命を守る建築家は、己も人も信用してはならない。他人任せにすれば、誤りを見逃してしまう。代理人任せにすれば、誤りを是正出来ない。設計図書であろうと信じない。自身で確りと読み込み、施工図を描き承認を得て工事を進めて行く。

私は、今日も現場を廻り、皆と共に安全を最優先した人を守り、心地良く、美しい建築物を創って行く。

そして、社員を大切にした企業経営を行う。

母に孝を尽くし、父に代わって妹達を大切に生きて行く。

妻とは、天に在れば比翼の鳥の如く、地に在れば連理の枝に成りたい。

此れまで、我が拙い文章を読んで下さった読者の皆様、有難うございました。

あふときは
語りつくすと
思えども
別れとなれば
残る言の葉　主税

投稿規定　声・ネットワーク400字、論壇1000字、ティータイム600字。住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記。〒900―8525　那覇市天久905。原稿は琉球新報社オピニオン係に郵送。ファクス098(865)5234、メールkoe@ryukyushimpo.co.jp　問い合わせは同係☎098(865)5175。他紙との二重投稿は厳禁。掲載の可否についての問い合わせには応じかねます。「うそっぱち」は社会部ファクス098(865)5222。